

総括

ムラオ セイイチ
村尾 誠一

この国際日本文学研究集会の運営に関わる委員会の委員長を務めております、東京外国語大学の村尾誠一でございます。総括ということでお話をさせて頂きたいと思います。皆様は、冬の夕暮れの淋しさというよりも、むしろシンポジウムの余韻で心が熱くなっていらっしゃるのではないかと思います。私もそうです。今年から新たなやり方として、テーマをシンポジウムで議論して、研究発表はテーマを設けない自由発表ということにいたしました。

この余韻の残るシンポジウム「テキスト・ジェンダー・文体——日本文学が翻訳される時——」、これはジェンダーによる差が顕著である日本語で書かれた文学を、世界の多くのジェンダー差が日本語に比べて小さな言語に翻訳する時、どのような問題が見えてくるかということを発端にしたテーマだった訳です。テーマはありきたりで陳腐にも見えますが、おそらくそうではない展開になるだろうと思っていました。実際そうではなかったということは、このシンポジウムで明らかになったと思います。

このシンポジウムを簡単に今総括するのは、とても私には無理でございます。感想となりますが、表層でいえば、日本語の位相の多様性といったものが見えてきたと思いますし、深層としてはジェンダー的なもの、近代の我々が考えているジェンダー的なものと言い換えるべきなのかどうか、それが非常に深くて広がりを持っているのだ、この両者が一筋縄ではない関係性を持っているのだということが見えてきたように思います。これは翻訳ということだけの問題ではないのだらうと思うのです。最後に学生の理解力の問題が出てきましたけれども、それよりももう少し大きな日本社会と無縁な日本語を母語としない読者の文学への理解といったような問題にも密接に関わってくるのではない

かと思いました。非常に大きな課題が提示されたと思います。これはどういふふうを持ち帰るか、本当にわくわくするのは私だけではないでしょう。このシンポジウムは企画以来、様々な紆余曲折があったことは、もう既にお判りだと思いますけれども、こういう場が共有できたことは本当に素晴らしいことだと思います。司会の中川成美さんをはじめ、パネラーの呉佩珍さん、Chiara GHIDINI さん、小嶋菜温子さん、そしてレジュメを頂いた Sharalyn ORBAUGH さん、原稿をいただいた Maria Teresa ORSI さんに、敬意と感謝の念を表したいと思います。それから、コメントを寄せて頂いた武田佑希さん、本当にありがとうございました。質疑を行い、問題を共有して下さったフロアの皆さんにも感謝いたします。

さて研究発表ですが、今年は自由発表ということで、それぞれが研究を進める得意なテーマでエントリーがなされたと思います。方法に注目して総括すると、次のようにならうかと思っています。まずは外国との関係を手法にした研究、最初の曹喜眞さんによる「朝鮮の古時調と日本古典和歌の対比研究の試み－自然素材に着目して－」、これは従来の比較文学の手法では成し得ない、「対比」とでもいべき新たな研究方法を志向するものと考えます。とはいえ、中国からの影響が双方に顕著であることは言うまでもありません。胡穎芝さんの「『草枕』と遊仙文学」は、従来の比較文学の方法によるものですが、詳細なものだったと思います。

Patrick SCHWEMMER さんの「有馬晴信のキリシタン語り物『日本に奇跡的に現れた十字架の事』——イエズス会日本文学運動の研究序説——」、これは16世紀のキリスト教文学として、非常に興味深いものでした。当時の日本のヨーロッパ思想の受容ということでも、大きな問題をはらんでいると思いました。また、今回は海外への発信に関わる研究が三本あったかと思っています。劉穎さんの「西鶴浮世草子の中国語訳についての研究－銭稻孫訳『近松門左衛門・井原西鶴選集』を中心に」、Imran MOHAMMAD さんの「インドに於ける俳句の享受」、常田慎子さんの「ヤマタ・キクと能－フランスでの能の紹介と翻

訳」です。最後のヤマタ・キクを私が知らなかったのは、本当に無知のなせる業でございまして、恥じ入るしかないのですけれども、インドのワルマ教授もそうです。ただ、これは私が、と言ってよいのかどうかはやや問題で、海外における日本文学・日本文化の普及に力を尽くした人々についても、しっかり記録しておく必要を痛感いたしました。海外の研究者から尊敬の念をもって語られる研究者が何人もいらっしゃるのですけれども、その中で正直に申しまして私の知らない方が何人かいます。これは良くないことだと思います。要するに、そういう方が日本では忘れられてしまっているという例、実は少なくないのではないかと思います。そのあたりも、今後考えていかななくてはいけないということも痛感いたしました。

それから必ずしも「外国」を介在させない研究、Magali BUGNE さんの「『歌舞髓脳記』の諸本をめぐって－金春禪竹の芸術理論の成立過程を中心に」は、金春禪竹の思想形成を『歌舞髓脳記』の諸本の比較の中から浮かび上がらせるというもので、文献学的な国文学の王道的な方法だったかと思います。海外の研究者がこういう方法で研究することは、ひとつのインパクトだと思います。武田祐樹さんの「林家の学術と歴史書の編纂」も、手堅い文献学研究だったと思います。井上泰至さんの「井原西鶴『武道伝来記』論の前提を疑う」も、あまり我々が疑問を持たない「武道」という言葉の流通に重要な提言がなされました。洪晟準さんの「『頼豪阿闍梨怪鼠伝』の構造－唐糸の物語を中心に－」も登場人物の機能を分析する手堅い手法だったと思います。Jyana BROWNE さんの「18世紀初頭の人形浄瑠璃における新たな演技の共同体」は、都市に生活する人々の共感の場としての「劇場」という、劇場が本来持つ機能を開示したようで、発想が面白いと思いました。

発表にもテーマが設けられた今までのように、様々な発表、様々な言説が結局はテーマに収束していくというかたちではありませんでした。海外に関係する研究の比重の重さは当然ながら、他の手法でも、発表者の国籍とは無関係に日本文学の重要な問題が様々な議論されたということで、豊かな時間が持て

たかと思います。

いつもながら、ショートセッションは萌芽的な問題も持ち込まれ、白熱したと思います。ポスターセッションについても、実りがあったと思います。このセッションは近々修士論文を提出する大学院生にとっては、論旨の最後の確認の場としても使えるのではないのでしょうか。事実、そういう使い方をした人もいました。大家の方のチャレンジも歓迎ですが、若い方のチャレンジも大歓迎です。なお、このポスターセッションについてですけれども、シンポジウムでも研究の言語の問題が出てきましたが、実は今年から英語での発表もオーケーということになっていたのですが、今年は残念ながらありませんでした。英語の方が発表しやすいという方は、英語での発表にもチャレンジして下さい。我々としても、英語の発表に付き合うというのは大変貴重な経験だと考えております。

まだまだ今回の集会で触れたいことはありますが、これから来年のことに移りたいと思います。来年も、今年と同じやり方で継続したいと思います。今年と同様にテーマはシンポジウムテーマとして、予め依頼したパネラーの方にお話し頂き、フロアを交えた討議でテーマを深めるといふ、そういうかたちにしたいと思います。さてテーマですけれども、「図像の中の日本文学」です。奈良絵本・絵巻をはじめとする従来の絵入り本研究よりも、もっとずっと広い概念で考えております。勿論、そういう研究の貴重さは言うまでもないのですが、今回はもっと広い概念で議論をします。パネラーの人は選定は委員会にお任せ下さい。活力のあるパネルを組みたいと思っております。

公募による発表については、特にテーマを定めず、内外の研究者が現在抱える一番重要な問題を発表して頂き、議論をするというかたちにしたいと思います。研究発表は来年もおそらく広く応募があるものと期待しております。ぜひ皆さん挑戦して頂ければと存じます。

来年の日付ですけれども、11月29日（土）、30日（日）です。場所は、ここ立川の国文学研究資料館です。毎年言っていますけれども、モノレールの中

から、朝、御覧になった富士山、これは私も住んでおります、この多摩地区の風景の自慢でございます。遠望する世界遺産というのも、なかなか良いのではないかと思います。来年もこの美しい多摩の風土の中で大いに議論をしたいと思っております。非常に蕪雑でございますが、これで総括を終わります。遠路を帰る方もいらっしゃると思います。お気を付けてお帰り下さい。どうもご清聴ありがとうございました。